

ローマにおけるユダヤ人の動向

相 沢 文 蔵

序

- 1、ディアスポラのユダヤ人
- 2、ローマ権力者のユダヤ人政策
- 3、ローマにおけるユダヤ人社会
- 4、ユダヤ人の宣教活動とローマ文人のユダヤ観

序

原始クリスト教がヘレニズム的ローマ世界に進出するにあたり、各地に早くから散在して根を張っていた国外離散^{ディアスポラ}（*Diaspora*）のユダヤ人集団やその会堂^{シナゴグ}を飛石伝いに伝播していった。クリスト教は初代教徒達の宣教活動を通して次第に自己の性格を明確にし、やがてはユダヤ教から袂別するが、その過程においては両者が未分離のまゝに、微妙にからみあい、交錯していた時期があった。それは場所的に異なるものがあるにせよ、ローマ市にあっては、大体A.D. 40年頃から50年頃までとしてよいであらう。

クリスト教の起源と成立の頃にはローマには既にディアスポラのユダヤ人の集団社会が存在していた。そこは又、初代宣教師達の巡回伝道の終着点でもあり、やがてそれはクリスト教の発展において最も重要な拠点たるべきところであった。最古の福音書がローマにおいて成立を見たことについても定説がある。このローマにおいて、ユダヤ教とクリスト教が交錯した時期を中心に、そこにあったユダヤ人の動き、ローマ権力者との関係やその宣教活動、これに対するローマ市民の反応等をユダヤ人側から見てゆきたいと考える。

ローマ市におけるユダヤ人の動向はユダヤ民族の歴史において重要な一部をなすが、クリスト教の発展とも深いところでつながりをもっている。ここに扱う問題はクリスト教的立場から見られることが多いが、これをユダヤ民族史の一部として見てゆく点に多少とも意味があるかと思われる。しかし、小稿に盛り得るものは綜観的覚え書を出るものとはならないであらう。

1、ディアスポラのユダヤ人

ユダヤ人は早くから種々の動機をもって自らその故国を捨て、地中海世界の各地やオリエント諸地方に向って絶えず静かなる国外流出を行っていた。この様な自発的な出国とならんで、国外の権力者の侵略による強制的な集団移住も断続的に行われた。この様な出国の二つの方式―自発的移住と強制的移住―は後まで続いて見られたところであった。^①

ヘレニズム時代に入ると、この二つの方式ともに著しく進められた。地中海域の海港は互いに活潑な貿易関係に結ばれ、内陸交通も促進された。ユダヤ人は近隣の諸種族と共に個人的に、或いは集団的に、小亜をへてギリシヤやイタリアの主要都市にまで進出していった。一方、ヘレニズム諸国の盛衰の激しい動きはユダヤ人の祖国をも押し流さ

ずにはいなかった。それは、シリア（セレウコス朝）とエジプト（プトレマイオス朝）の両強国間に介在し、争奪のまゝとされ、交互にその支配をうけ、その際、大量のユダヤ人は奴隸として連行された。この様な宿命は彼等をして安住の地を求めて出国するのを更に促すことゝもなった。

シリアの国王達がユダヤを侵略した際、その軍隊の後には奴隸商人がユダヤ人をつなぐ鉄鎖を用意してつき従うのが常であつた。^③シリアがローマに支払うべき賠償金の財源を得るためにユダヤ人狩りを行うこともあつた。^④この様なユダヤ人の大量奴隸化は、政治的野心に燃えたローマの軍閥勢力の首領達によつて著しく進められることになった。彼等が東方各地において収奪をほしきまゝにした時、ユダヤ人はその被害を免れることは出来なかつた。クラッススやポンペイウス、反カエサル派となつたカシウス等によつて彼等は大量に奴隸とされ、又、BC. 4年から10数年にわたつて断続したユダヤの動乱はローマ軍によつて鎮圧されたが、その際も多数の者が殺りくされ、免れた者は奴隸とされた。

絶えざる補給を必要としたローマの奴隸制度の需要にこたえて、地中海世界各地の海港や都市の奴隸市場は常に賑いを見せていた。それら奴隸の出自はローマ勢力の接触したあらゆる他民族に及んだが、ユダヤ人はそれらの中で最も主要なるものであつた。^⑤地中海世界の主要なる都市には殆ど例外なくユダヤ人の居住を見たことは、文献的に又は考古学的に実証されている。帝政初期のイタリア半島について見ると、ローマ市のほか三〇を数え、シシリー島には九、サルディニア島にも二を見ることが出来る。これらに居住したユダヤ人は商業的動機を主にした自由なる移住者のほか、かつては奴隸身分におかれ、後に解放された者やその子孫から成り、いずれも自由なるローマ市民として扱われていた。ユダヤ人奴隸はこれを所有し、使役する主人にとっては入手しやすい点では随一であつたが、使いにくい点においては他の種族出の奴隸に比すれば比較にならなかつた。ユダヤ人奴隸はその出自において、必ずしも下賤な者とは

限らず、むしろその反対の場合が多かった。能力あり、ユダヤ教の教義を身につけた者達は、ローマ人には理解し難い「見えざる神」の信仰を堅持し、独特の宗教慣習や風変りな食事法等を日常生活の中に守り、消極的抵抗にかたまっていた。彼等に対して、ローマ人の如く生活すること—Do at Rome as the Romans do—を期待することは出来なかった。それどころか、他種族の奴隷達に対して、ユダヤ教の宣教を試みる場合さえも見られ、ユダヤ人奴隷はローマ貴族達の奴隷経済論においても色々問題とされたところであった。ローマの奴隷所有の主人達は屢々これをもて余した。ユダヤ人奴隷は自らの勤勞の報酬を貯えて自由を買いとるか、又は先に解放されて自由となっていた解放奴隷(libertini)や、定住していたユダヤ人商人達によって買ひもどされる形式によって解放された。彼等の間には相互扶助の同胞愛(Philadelphia)が甚だ強烈であった故に、この最後の例こそ、最も普通に見られたのではないか。広く地中海世界の各地に散在したディアスポラのユダヤ人を数的に把握するのは、もとより困難であるにしても、全然不可能ではない。シビル袖託集の中にはB.C. 2世紀頃の事態を伝えるとされる「ユダヤ人はあらゆる国々に入りこみ、すべての海にひろがる」^⑥とする記事があり、ストラボン^⑦は帝政初期の情勢を「ユダヤ人はあらゆる国々に入りこみ、この種族をうけいれぬ処はなく、彼等が支配勢力をなしていない処をさがすのは困難である」^⑧と伝える。ほぼ同時代のユダヤ人学者を代表するフィロンは「ユダヤ人は地上到る処にひろがり、その数は土着の住民に比して劣らない」^⑨という。ヨセフォス自身もその著書において同様の事を屢々語っている。しかし、これらの記述はまだ数的には具体性を欠いている。数的史料は全然ないわけではなく、フィロンはエジプト居住のユダヤ人の数を一〇〇万としている。この数字は大体において信頼し得るものとしてよいであろう。

エジプトとならんでユダヤ人の数の多い地方としてシリアをあげなければならぬ。地理的に彼等の祖国に近いことからもうなづかれるが、それは特にアンティオキア、ダマスクスの両大都市に集中していたことも当然であろう。こ

のシリアに居住したユダヤ人の数も一応エジプトの場合と同じ一〇〇万位と見てよいであろう。シリアから西に向つて小亜に入ると、その到る処の都市にユダヤ人の居住を見たことは、パウロの旅行をあとづけることで簡単にうかがうことが出来る。この小亜一帯に居住したユダヤ人の数に、ギリシャ以西とエジプトをのぞく北アフリカ一帯にわたる広い地域に居住したユダヤ人の数をあわせて一五〇万とする見方も妥当なところであろう。

同じくA.D.初期頃において、彼等の本国に居住したユダヤ人の数について見ると、ヨセフオスは毎年の過越祭の際、イエルサレムに集る者の数をも三〇〇万と伝える。^⑮この祭事の際には国外のディアスポラのユダヤ人まで雲集したことは事実であるにしても、この数字はヨセフオスに常に見られる数的誇張の一例であろう。彼等の本国を歴史地理的に考察して、そこに一〇〇万以上の人口を養うのは困難だとされる。古くから見られた彼等の自由なる出国は、その国土の狭さから発している生活条件の悪化に由来している点も大きかったのであつた。そこには又、ヘレニズム時代の世界的風潮にあわせて、ローマの統治という現実があり、ギリシヤ人やローマ人等の非ユダヤ人の居住も相当数見られた筈である。かくてユダヤ人の本国にはこれらの非ユダヤ人を含めて一〇〇万近い人口があつたとしてよいであろう。ハルナックは本国のユダヤ人のほか、広く地中海世界各地に散在するディアスポラのユダヤ人の総数を推計して四五〇万という数を出した。^⑯この様な試みは他に類がなく、その数も穏当と考えられる故に、一応これに従うことにしたい。

古代世界における人口を算出したペロツホによれば、A.D.初期におけるローマ帝国内の総人口を五四〇〇万とする。^⑰これに対するユダヤ人の数四五〇万の比率を見ると10%にみたぬ。そしてその又20%程度が本国には居住したことになる、本国居住と国外居住の差があまりにも大き過ぎることがわかる。彼等の増殖率の極めて大きいことについては種々伝えられているが、これを以て国外居住者の過大さを説明することは出来ない。これは後にふれる如く、地中海

世界到る処の都市においてユダヤ教に改宗した非ユダヤ人もユダヤ人なみに扱われたこと、従ってこの過大な数字は改宗した非ユダヤ人の数をも含むものと解することによって説明されなければならない。

〔註〕

- ① Encyc. Biblica col. 1106
- ② ヨセフオスは B.C. 4 世紀、小亜におけるギリシヤ哲学者達と教養あるユダヤ人の出あひを伝える。 Apon I 177f.
- ③ I Makk. 3⁴¹
- ④ II Makk. 8^{10f}.
- ⑤ Deissmann, Paulus 1911 は地中海世界におけるユダヤ人居住の都市一四三をあげる。 Herzfeld, Handelsgesch. der Juden des Altertums 1879 s. 204 ノレニズム時代ユダヤ人の居住した五二の都市をあげその殆どは商業的に繁栄した都市なることを証している。イタリヤにおける都市については Juster, Les Juifs dans l'Empire romain 1914 I p. 180ff.
- ⑥ Orac. Sibyll. III 271
- ⑦ Schürer, Gesch. des jüdisch. Volkes 1898 III S.3
- ⑧ Ant. XIV 115
- ⑨ Legat. ad Caium 36
- ⑩ Schürer, op. cit. S. 5
- ⑪ Bell. II 398 VII 43
- ⑫ Harnack, Mission u. Ausbreitung des Christentums 1924 I S. 9ff
- ⑬ ハルナックはここでデアヌボラのユダヤ人の推算を地域毎に試みているが参考とすべきものが多い。
- ⑭ in Flaccum 6
- ⑮ Schürer, op. cit. S. 22
- ⑯ Bell. II 280
- ⑰ Harnack, op. cit. I S. 12
- ⑱ Encyc. Biblica col. 1112 ここでは三ー四百万の教数をあげず。
- ⑲ Beloch, Die Bevölkerung der griechischen-römische Welt. 1886 S. 243 Juster, op. cit. I P. 209f
- ⑳ Harnack, op. cit. S. 13ff

2、ローマ権力者のユダヤ人政策

ユダヤ人がローマ市に定住するに至った時期を確定するについては問題が多い。しかし、ユダヤがローマと正式な

外交関係に入ったのはB.C. 2世紀の半ば頃であったことは確実である。即ち、ユダヤの輝ける民族王朝ハスモン（マカベア）家がシリアの圧制をのがれて念願の独立を勝ちとるにあたり、ローマに使節を派遣して親交を求め、攻守同盟の如きもので結び、しかも、その条約の正文も伝えられている。この内容については問題はあるにせよ、この様な外交関係を通じて、この頃からユダヤ人はローマ市中に定着し始めたとしてよいであろう。しかし、ローマの東方発展に伴って、各地の属州との経済交流が頻繁となるにつれ、ディアスポラのユダヤ人がその一翼になったことは明かだ、この頃までには既にユダヤ人商人で属州とローマとの間を往来するものもあり、ローマ市民にはユダヤ人の姿は目新しいものではなかったであろう。ユダヤとの正式な外交関係が見られたその頃から既に、ローマにおいてユダヤ人による宣教活動が行われ、しかもローマ当局者はこの様な動きに好意を示さなかったかに見える。次のローマ側の史料がそれを伝える。「ユダヤ人達は Sabasi Tovia の信仰をもってローマの習俗をおかさんと試みたので、彼等を帰国せしめんと考えた。」これをシュラーはB.C. 140年に行われた第三回使節団と関連があると見てゐる。②この結果については伝えられるところはないが、二世紀の末頃にはユダヤ人の定着は愈々進み、しかもそれは年を追って増加していったことは、ディアスポラのユダヤ人一般の発展ぶりから推測し得るところである。

ともあれ、相当に大量のユダヤ人定住が見られるに至るのはB.C. 60年代に入ってからのことであった。しかもそれは以前の親交的な関係ではなく、征服者に対する被征服者の関係においてであった。ローマの東方発展の波に乗った軍閥の首領達によってユダヤ人との関係は全く変っていった。野心的な將軍ポムペイウスは東方各地を収奪した際、ユダヤ人の祖国も彼のねらうところとなり、ハスモン家に干渉して、これを保護の下に加え、抵抗するユダヤ人を殺りくし、神殿の至聖所をおかす如き行為にさえ出た。更にハスモン一族のほか多数のユダヤ人を捕虜としてローマに連行し、その凱旋行列の添え物にした。③（B.C. 61年）。彼等はそのまゝ奴隸として渡されたが、多数のユダヤ人がローマ市

に見られたのはこの時以来のこととされる。^④

この頃には西方におけるディアスポラのユダヤ人の発展は著しく進んで居り、ローマ市にも相当数のユダヤ商人が定着していたと考えられる。彼等は同胞である奴隷の買いもどしに奔走したであろうし、又奴隷自身も自らの勤労によって解放されたり、種々の方式をもって自由な解放奴隷へと上昇する者が見られたであろう。彼等こそ、やがて形成されてゆくユダヤ人集団社会の中核をなすものであった。ユダヤから連行され来った者達は決して下層者ではなくむしろその反対で、その中にはユダヤ教の祭司や学者等、指導力をそなえた者達をも含むものであったと見てよいであろう。この様に定着するユダヤ人が増加するにつれ、小亜やギリシャ或いは遠くアレクサンドリア等からの移住者をも吸引し、愈々その数はふかれていったことであろう。

カエサル（カイサル）——（Caesar, L. Kaiser-Gr.）のユダヤ人に対する保護と恩顧は先ずローマ市在住のユダヤ人に始まり、地中海世界の各地域の諸都市に及び、彼の後継者達によって大体それはうけつがれた。カエサルとヘロデ家の間の保護関係についてはさきにふれる機会があったが、彼はディアスポラのユダヤ人の社会的・経済的実力について充分なる認識をもっていた。一方、東方到る処の都市にはギリシャ系市民達が深く根を張って居り、その統御には手を焼くことが多かった。これらのギリシャ人勢力を牽制するためには、これと鋭い対立関係を続けているユダヤ人に保護を加えて對抗せしめるのを最も賢明なる方策としたであろう。カエサルが時のローマに流れていた反ユダヤ感情にとらわれず、積極的にこれに保護を加えたのは、この様な政策的立場にあった故である。カエサルによって打倒された旧勢力はユダヤ人を徒らに警戒するのみで、これを利用して途を知らず、キケロ等によって代表される如く、反ユダヤ感情をむき出しに表明するのみであった。これに対してカエサルは大きな修正を加えんしたのであった。カエサルは反対勢力を次々に倒してその地歩をかためていった。特にユダヤ人から抜きがたい怨をかったポムペイ

ウスを打倒したこと、次に反ユダヤ感情を代弁していたキケロ等の旧勢力を消滅せしめたことは、ローマ在住のユダヤ人はもとより、広くディアスポラのユダヤ人の讃仰のまゝとなった。彼の単独支配が実現すると、これまで反対勢力に利用され、政治的な動きに走り勝ちであった各種の団体や結社に解散を命じた。その際、古くから存在した由緒あるものとユダヤ人の集団は除外される優遇を受けた。ローマ在住のユダヤ人は彼を徳とすること深く、彼の不慮の死は彼等を深く悲しませ、彼等はカエサル⑥の死の現場を離れ得ず、終夜、心からの哀悼の意を表した。^⑦

カエサルのユダヤ人に対して示した数々の好意と恩恵についてはヨセフオスはまとまった史料を伝えている。ヨセフオスのユダヤ古記 (*Antiquitates Judaicae*) 第14巻にローマ権力者達がユダヤ人に関して発した布告集がある。これは二〇数ヶの布告 (*dogmata*) をほぼ時間的順序に従って配置したもので、それらの内容の検討については改めて独立に論ぜらるべきであるが、これらに盛られている事実の真实性については、大体定説があるとしてよい。^⑧ これらの布告集のうち半分に近いものはカエサルの発したものであることも注意しなければならない。この布告集の細い内容についてはこゝで触るべくもないが、ハスモン家の当主の地位を安堵するお墨付を始め、ユダヤとローマの友交關係を確認し、これを東方各地の都市に周知させるためのもの、ユダヤ国内における徴税権の保証、ユダヤの使節がローマにおいて受くべき待遇等その内容は多岐にわたっている。カエサルのこの保護政策は大体において踏襲されるが、彼の死後、一時イムペラトールに就任したドラベルラ⑨がこれを確約したもの等、カエサル以後の権力者達のものまで含んでいる。

これらの布告集を通して、ローマ市においてユダヤ人が容認されていた特殊な地位を知ることが出来る。彼等はユダヤ教の宗教団体を形成し、その独特な慣習を妨げられることなく守り得、イエルサレム神殿への献納金の持ち出しも認められる。又ユダヤ人はローマの「朋友にして同盟者 (*philon kai symmachon*)」たることを確認され、軍役を課

せられることを免れる^⑬。この様なローマ市において彼等が与えられた特権は東方における諸都市においても同様に与えらるべきことが要求される^⑭。又東方各地のユダヤ人はそこに遠征するローマ軍隊から金銭を徴されたり、冬営のための負担金を強制されるが如きことがあつてはならぬ事等が規定される^⑮。

カエサルのは死後は派閥の対立が再び尖鋭化した^⑯が、ユダヤ人に対する政策においてもそれが反映された。カエサルの後継者を以て任じたアントニウスはユダヤ人保護政策をついだが、反対勢力のブルトゥス、カシウス一派はキケロ流の反ユダヤ的立場を明かにし、彼等が小亜から東方一帯に拠つて軍備を整えた際、所在のユダヤ人に軍資金を課したり、奴隷狩りを行う等の収奪を行った^⑰。これら両派の対立にあつても、両派の間の人間的な動きには微妙なものがあり、キケロの女婿ドラベルラの如きはアントニウス側にくみし、シリアの総督に任ぜられた際は、ユダヤ人に恩顧を加え、カエサルにならない種々の保護を与える措置をとつた。アントニウスとドラベルラが共にコンスルとなつた時ユダヤの使節を引見し、元老院と召集してユダヤとの支交關係を確認した^⑱。

アントニウスを打倒して最後の勝者となつたアウグストゥスもヘロデ王家に数々の恩顧を加えたほか、ディアスポラのユダヤ人、特にローマ存住のユダヤ人に対して寛容と恩恵をおしなかつた。カエサルの死後の混乱のうちにかつて解散せしめられた団体や結社のなかでひそかに再建されたものがあつた。彼は再びそれらに禁止令を発して解放せしめた。この際もユダヤ人集団はそれを免かれ、何等の拘束を加えられることはなかつた。ローマ市には後述する如く、彼の名を冠したユダヤ人集団が存在したことはその間の關係をうかがわせるものである。在住のユダヤ人の下層者もローマ市民権を認められ、穀物の配分に与ることが出来たが、その日が安息日にあたる場合は、彼等に対する配分を特に翌日にのばすことも許した^⑲。

アウグストゥスのユダヤ人対策も政策的なものに発していたことは明かで、個人的にはどの程度ユダヤ人に好感を

よせていたのか疑問である。なお、B.C. 4年、ヘロデ王の死に際してユダヤの上層の有志達がローマに赴き、アウグストゥスの許にヘロデ王家の支配をやめ、ローマの監督下に自治を与えられんことを請願した。この際、ローマ在住のユダヤ人八、〇〇〇名がこの請願運動に加わったことが伝えられている。⁽²⁰⁾ ヨセフオスのこの数字には誇張があるにせよその頃のユダヤ人の数は愈々増加を見ていたと考えられる。

次のティベリウス帝(A.D. 14 ~ 37) からクラウディウス帝(37 ~ 54)の時世にかけては事件の続発があり、これまでのユダヤ人優遇策に変更を加えられたかに見えた。ティベリウス帝の時にはユダヤ教を含めて、東方の諸宗教はローマ市民の中に相当にくいこみ、為政者として放置し得ぬ事件が相ついだ。⁽²¹⁾ A.D. 19年にはエジプトの女神イシスの信者であるローマ貴婦人からんだ事件があり、その祭司は処刑され、イシス神像はティベル河に投棄された。同年、ユダヤ教に改宗したローマ貴婦人に対し、悪質なユダヤ人数名がイエルサレム神殿に財貨を奉獻することをすゝめてそれを預り、送らずにこれを横領した。この訴願をうけた帝はユダヤ人弾圧を決意したという。事件は鎖事の如く見えるが、この種の事はそれまで累積していたと考えられ、ユダヤ人に対する寛容と好意も社会的秩序を傷つけない限りにおいて与えられたことを示すものであった。かくてローマのユダヤ人に対してこれまでにない処断がなされた。即ち、ローマ在住のユダヤ人のうち兵役に就き得る若者四、〇〇〇名を従来軍役免除の恩典を廃して徴集し、これをサルディニア島における野盗の蜂起を鎮圧するために送った。ユダヤ人嫌いのタキトウスはこれを僻遠の地へ送られた「安価なる犠牲(vile damnum)」という。⁽²²⁾ 残余のユダヤ人もその忌むべき信仰を捨てざる限り、イタリアの地より退去すべきを命ぜられたという。この事件については、スエトニウス、ヨセフオス共にほぼ一致した記述を伝えている。この四、〇〇〇という数字を基礎にティベリウス帝の頃のローマ在住のユダヤ人の数を5万から6万と見るものがある。⁽²³⁾

この時のユダヤ人弾圧はその頃権勢を振ったセヤヌスによって行われたことは明らかであるが、彼の死(29年)

と共にそれはゆるめられたと考えられ、この弾圧もどの程度行われたかについては問題がある。フィロンは40年代のこととしてローマ市には多数のユダヤ人集団が存在したことを伝えている。²⁴ クラウディウス帝の治下においても、ローマ在住のユダヤ人の間に紛争があり、それは放置し得ない程の騒ぎとなり、この時も追放の処置がとられた。それはスエトニウスの伝えるかのクレストス事件として知られているものである。「帝はクレストスに扇動され、常に騒乱をまきおこしていたユダヤ人をローマから追放した。」²⁵

このクレストス *Chrestus* をクリストス *Christos* の転化と考え、クリストスを宣教する者がローマに來り、新しい福音を伝え、これによってユダヤ人の間に分派運動がおこり、その騒ぎは放任出来ない程のものとなって、再びユダヤ人追放が行われたとするのは通説としてよい。²⁶ この事件にからんでクリスト教徒は一時にせよ、ローマを捨て、他地方に移ったことは確実であるにしても、追放ほどの程度に行われたのか疑問があり、精々小範圍にとどまったのではなからうか。この様な一連の弾圧や追放も彼等のローマにおける実勢力を弱めるには至らず、逆に益々抜くべからざる実力となつていった。

註

- ① *IMakk.* 8
- ② *Sebazius* と *Zebaoth* の混同關係について *Schürer*, op. cit. III S. 29
- ③ *Bell.* I 152f. XIV 70f.
- ④ *Friedländer*, *Sittengesch. Roms* S. 206
- ⑤ 拙稿「人文社会」6号「ヘデロ王に関する一考察」
- ⑥ *Suetonius*, *Caesar* 42 *Iustus*, op. cit. I P. 409
- ⑦ *Suet.* *idem* 84
- ⑧ *Ant.* XIV 185-267
- ⑨ *Noth*, *Gesch. Israels* 1950 S. 345
- ⑩ *Ant.* XIV 196, 199
- ⑪ *idem.* 225
- ⑫ *idem.* 213
- ⑬ *idem.* 223, 225
- ⑭ エフェソス、デロス島、コス島、サルデス、ミレトス、ペルガモン、等にあてた布告や命令

- ①idem 192
 ②Bell. I 222 Ant. XIV 275
 ③Ant. XIV 219. 225
 ④Suet. Aug. 32
 ⑤Legat. ad Caicum 23
 ⑥Bell. II 80
 ⑦Ant. XV 65f. Suet. Tib. 36
 ⑧Tacitus, Annal. II 85
 ⑨Juster, op. cit. P. 209

3. ローマにおけるユダヤ人社会

ディアスポラのユダヤ人はヘレニズム世界の主要なる都市にゆきわたり、そこに定着して商業活動や特殊な手工業等の生業に従い、富を貯えるものも多かった。彼等はその土地の宗教や習俗にならわず、互いによりそって集団居住を行うのが常であった。その様な集団社会を「シユナゴゲ Synagoge」と称したが、これは集合すること、又はその場所を意味するギリシヤ語に発している。これは広狭二義をもち、広義には彼等の集団社会の全体を指すが、狭義にはその集団の中心である礼拝や祭儀のために集合する建造物、即ち会堂そのものを指した。これも、彼等の日常生活が会堂を中心とした宗教生活と切り離し得ない一体をなしていた事を示すものである。未だ会堂を建てるに至らぬ処でも必らず「祈りの場 Proseuche」をもち、それが彼等の生活の中心をなした。この礼拝と祭儀の場を中心とした彼等の団結は甚だかたく、相互扶助の精神も強かった。彼等の集団居住はその都市の住民から一応隔離されたものであった故に、それは後世に見られた如き一種のユダヤ人街（Ghetto）を形成した。しかし、そこには後世のゲットウに

なおここで同時代のローマ市の人口五〇万〜八〇万とする根拠をあげてゐる。

- ⑩Legat. ad Caicum 161
 ⑪Suet. Claud. 25
 ⑫Schürer, III S. 3 Friedländer, op. cit. III S. 206 Chrestus を特定の煽動者の名前と解する説をとらない。
 ⑬Acts 182, 19, 26 Rom. 16g
 アクラ、プリスキラ夫婦の例

必ず附着したパリア的性格は未だ見られた筈もなく、その都市に先住した非ユダヤ人に對抗し得るだけの實力をそなえ、明るい健康さが見られていた事が強調されねばならぬ。

その集団社会は行政面における自治は得られないにせよ、宗教的には勿論、時には司法的にも、限定されたとはいえ或る程度の自治を主張し得た場合が多かった。彼等の個人生活と団結の中心は会堂であつたが、それに併設されていた長老会議ゲルシーヤ(Gerousia)は彼等の社会の中心をなしていた。これらは彼等の伝統的な古制の従つたものである。この様な集団社会に生きた彼等の団結は甚だ強固であつたが、他都市における同じ集団社会との連絡や交流も甚だ密接であつた。ディアスポラのユダヤ人がよりよき生活条件を求めて気軽るに移動した例は数多く、又ユダヤ教の旅廻りの宣教者もこれら集団社会を次々と訪ねた。彼等の身軽るな移動性は到る処の都市に存したユダヤ人集団社会に強く見られた相互扶助的な同胞愛によるところが多い。その都市に買取られてくるユダヤ人奴隸を買いもどして解放したり、他地から流れてくる同胞達にも温い手を差し伸べた。すべてこの様なうけいれ体制は長老会議において整備されていたと考えられる。この様な彼等の集団社会の中に、やがてクリスト教という新しい福音を説く宣教者が入りこみ、これにとらえられる者も見られるに至ると、そこには混乱と動揺を生ずることになるのも当然のことゝしなければならぬ。

一方、ヘレニズム世界の各都市の一隅において営まれた彼等の市民生活は常に一つのとき難い矛盾を背負つていた。彼等は市民生活を営み、その非ユダヤ人の市民と對抗して権利を主張するためには、市民権を行使し、時には市政にも関与し、投票にも参加する等、種々の公務を怠ることは出来なかつた。市民的義務の一つに土着の神々の祭儀に参加することがあげられるが、これを拒否する市民の存在は原理的には考えられないところであつた。^④これに對してユダヤ人市民は市民的権利を主張しながら、土着の神を崇敬せず、彼等自身の神のみを拝し、時には積極的に周囲の非ユダヤ人に宣教することさえあつた。この様な矛盾は彼等の国外移住の最初から背負つてきたところであるが、

これこそギリシヤ人市民からの攻撃の目標とされた点でもあった。ギリシヤ人勢力の優勢な大都市、例えば、アレクサンドリアやアンティオキアにおいては機会さえあれば、ユダヤ人に対する攻勢は表面化して騒ぎをまきおこした。ディアスポラのユダヤ人の市民生活に必らず伴っていたこの様な矛盾をとくものは、ローマ権力者が彼等に認めた種々の特権であり、又これを各地に周知せしめんとして発した布告であった。しかし、ギリシヤ人の勢力の強い都市には徹底せず、両者の間に衝突はくりかえされた。たゞ、ローマ勢力が強く浸透していた地方にあってはカエサル寛容政策が明確にされた後は、大体それが踏襲されたと見てよい。

ローマ市におけるユダヤ人集団の性格も、広くヘレニズム世界の各都市におけるそれと基本的には異なるものではなかった。しかし、東方においてはギリシヤ人市民が優勢であり、そこには多少なりとも両者の対立に発する事件の頻発を見たのに対し、ローマ市にあっては此種の磨擦は見られなかった。時には権力者の忌諱にふれる如き事件もあり一部の者の追放を見る例もあったが、大体において平穏な都市生活を享受し得たものとする事が出来る。ローマ市にあってはギリシヤ系市民の勢力は強からず、又権力者による保護政策も一応徹底を見ていた。

ローマ市におけるユダヤ人集団の実体については、早くから発掘を見ていたユダヤ人墓地出土の碑銘によって知られるところが多い。既にシュラー等によって数十枚の碑銘が集録されているが、これらを通してA.D. 1世紀においてローマ市には数枚の夫々固有の名称をもつ集団居住区が存在したことがわかる。その名称にもいくつかの型式が見られる。

1. Sunagoge Augustesion 2. Sunagoge Agrippesion 3. Sunagoge Bolunni
- これらの如く、人名を冠したものがあり、ヘロデの名を冠したもので発見された。^①
4. Sunagoge Kampesion 5. Sunagoge Sibugesion 6. Sunagoge Rodion

これらの如く、地名を冠したものである。

7. Sunagoge Hebreon 8. Sunagoge Elaias

これは人名や地名でなしに、ほかの何等かの特性をあらわしたものである

これら個々について見てゆくと、1と2はアウグストウスとその側近のアグリッパをパトロンとしたユダヤ人集団と見てよく、3のボルムニウムの名は判然としないが、同名者はアウグストウスからヘロデ王の許に派遣された軍事指導官^⑧に見出され、或いはこれと何等かの関連をもつものかも知れない。ヘロデの名を冠したものは、広くディアスポラのユダヤ人が彼とその一家を徳としたことが多かった事情を反映するものであろう。4はマルスの野(Campus Martius)に、5は Subura 街に存在したものと解してよく、この両者とも商業殷盛の地域で、殊に後者は繁華街の中心を占めていた。これらはA.D. 1世紀の半ば頃には彼等はローマの中心部にまで進出していたことを証するものとしてよいであろう。6はロードス島と何等かの関係をもった集団と考えられ、この東部地中海の海上交通と貿易の中心をなした海港と密な通商関係にあったもの、或いはそこからの移住者を中核として成立したものであろう。7は当時ディアスポラのユダヤ人は一般にギリシャ語を用いていたのに対し、特に母国のヘブル語に対して愛惜を示した一団としてよく、8は何等かの理由でオリヴ(oliv)をその名に冠したものである。

帝政初期におけるアウグストウスとヘロデ家ならびに広くディアスポラのユダヤ人との間の恩顧関係には厚いものがあり、アウグストウスやその側近のアグリッパ等の権力者と特殊な庇護関係にあったユダヤ人集団が存在したことも異とするに足りないところである。又ヘロデ王家の一族は常にローマ宮廷に出入りし得た如き親近関係にあり、この関係を通してユダヤの上層者達も宮廷に接近し得たであろう。アウグストウスの后、リウィアはアクメと称したユダヤ女奴隷^⑨を寵愛したが、この女奴隷は宮廷とヘロデ王家の間に暗躍する立場にあったことがわかる。ティベリウ

ス帝の側近にあつた解放奴隷にサマリア出身タルルスなる者があり、彼はヘロデ家のアグリッパに高額の金子を貸与し得る程の財貨を所有していた。クラウディウス帝もユダヤの女奴隷を所有したことは碑文を通じてうかがうことが出来る。^⑩

ローロ市にあつたユダヤ人各集団は政治行政面において独立した地位を主張するには至らず、彼等の団体生活を規定してゐた長老會議ゲルンヤにおいて長老裁判を行う程度の自治を認められるにとどまり、宗教的独立を以て満足しなければならなかつた。全集団を統合する機関が見られなかつたことは明らかで、この点アレクサンドリアの場合と異なるものがあつた。恐らくは各集団は夫々ローマ権力者と結びついて、その庇護下におかれるのをぞみ、又その關係を最も効果的に利用したのであり、この様な権力者とのつながりをもち得なかつた集団こそ、かの屢々行われた弾圧や追放の対象とされたのではなからうか。これら集団社会の構造や機能等についてはシューラー等による詳細な研究があり、この小論においてはふれる余裕もないが、ギリシヤ系市民の勢力の極めて強かつたアレクサンドリアのユダヤ人社会の性格との比較において夫々の特殊性格を分析すべきであらう。

終りにA.D. 1世紀の初頭に地中海沿岸各地やローマ市を始めイタリアの各都市を騒がせた「偽アレクサンドロス事件」^⑪を検討し、その頃のローマ在住のユダヤ人の動向をさぐる一助としたい。ヘロデ王の晩年はその相続をめぐり、一門内に陰惨な斗争がくりひろげられ、その王子達も相次いで父に処刑された。その一人にアレクサンドロスなる者がいた。その頃、シドンの港町に体駟堂々として王者の風采をした若者が現れ、その容貌はなき王子に生き写しであつた故に取り巻き共が集まり、所在のユダヤ人は金品を献納する等で人氣をあおつた。次いでクレタ島をへてメロス島に渡つたが、ユダヤ人の間に評判は愈々たかまり、王者の行列を仕立てる騒ぎとなつた。一行は進んでイタリアのプテオリの港に着いたが、そのユダヤ人達は特にヘロデ家に親近感をよせていたので側近者の数もふくれ、そこから王の

行列を以てローマに向った。これを迎えるローマのユダヤ人の騒ぎも大きくなった。アウグストゥスは事の成行きに疑惑をいだき、処刑された王子の面識ある家臣を派して首実驗をさせた結果、偽者なることが見破られて捕えられ、体軀頭健なるため船漕ぎ奴隷とされることで一応この事件は落着を見た。この事件について経過をたどってゆくと、ヘロデ王家の人氣は地中海世界の到る処のユダヤ人の間に高かった事、その各地に富裕なるユダヤ人が存在し、経済的実力を握っていた事、その各地の富裕なるユダヤ人達は緊密な連絡網によって結ばれ、情報の交換が迅速に行われていた事等を知ることが出来る。

註

- ①染色、織物、ガラス吹き等の特殊な手工業は彼等の手にあつた。Juster, op. cit. II P. 305
- ②Encyc. Biblica col. 4833
- ③Ant. X N 256 Acts. 16:13
- ④Ramsay, Social Basis of Roman Power in Asia Minor 1941 P. 6 属州人がローマ市民権を賦与される各種の方式をあげる
- ⑤Schürer, op. cit. III S. 82
- ⑥Schürer, Gemeindeverfassung der Juden in Rom 1879 S. 33ff
- ⑦C. A. H. Vol. X P. 332
- ⑧拙稿「ヘデロ王の統治政策」(人文社会15号)一五頁 Bolumni—Volumni
- ⑨Bell. I 641, 661
- ⑩Ant. XVIII 48
- ⑪Schürer, Gemeinde. S. 7
- ⑫Schürer, op. cit. III S. 47ff. Juster, op. cit. I P. 409, 456ff.
- ⑬Bell. 101ff.

4 ユダヤ人の宣教活動とローマ文人のユダヤ観

カエサルの時以来、ユダヤ人はローマ権力者から政策的に種々の特権を与えられ、ローマの政治的支配の及ぶ領域内にあつては彼等の独特な宗教を信じ、特殊な生活慣習に生きることを容認されていた。しかし、彼等はいづこにあ

っても常に少数派であり、又彼等を取りまく世界は文化的にはヘレニズム一色であった。そこには又各種の土着宗教のほか、ミトラやイシスを始めとする東方的密儀宗教がひしめいていた。ローマ市にあつてもこの様相はそのまゝに見られた。

この様な文化的・宗教的潮流に流されないためには、ユダヤ人は絶えず、これに抵抗する身構えになければならなかった。彼等はユダヤ教の宣教師の活動にあわせて、一般に何処にあつても自らの分に応じた宣教活動を行った。それは自らの信仰に対する忠実さに発したのみならず、攻勢は最上の防禦策であることを知っていたからでもあつた。彼等の中にはヘレニズムの時流に流され、ユダヤ教の信仰を棄て、ローマの高官に昇進する如き例もなかつたわけではない。又一般の例とは見られないが、異邦人と結婚關係に入るものもあつた。ディアスポラのユダヤ人はヘレニズムに対する抵抗の身構えにも拘らず、又意識するとせざるとに拘らず、彼等を取りまいたヘレニズムの風潮に多少なりとも流されないわけにはいかなかった。

ローマ市にあつては、既にB.C. 2世紀の半頃、彼等が宣教活動を行った事については先に見たところであるが、ポムペイウスによつて連行された者達の中にはユダヤ教の祭司や学者達も含まれていたと考えられ、やがて彼等を指導者とする集団社会がローマ市の一角に形成され、しかもその数は増加を見ていった。彼等は会堂を根拠に積極的な宣教活動に出て、ローマ市民の中に改宗者を見出していったであらう。後出の如くキケロの著作中に見られる激越な反ユダヤ的言辭はユダヤ人の宣教活動とその効果を反映するものと解さねばならぬ。カエサルの好意的な保護政策に便乗して、彼等の宣教活動は一段と軌道にのつたものと考えられる。A.D.に入ると、益々その数を増したユダヤ人の中には放置し得ない動きを示す者もあらわれ、そのため弾圧を受ける例も見られた。しかし、これは当時のローマのユダヤ人の実力と地位をあらわすもので、大勢としては彼等は愈々確固たる地盤をかためていったとしてよいであらう。

ローマ市において彼等が執拗なる説得を以て周囲のローマ市民に働きかけたことは、ローマの知識人や文人達には誠に苦々しきことであつた。ホラティウスはその諷刺詩の中で彼等の宣教の執拗さを伝える。「ユダヤ人の流儀で君を無理矢理我等の仲間に入れてやろう。」^③又、彼はその友人の中にユダヤ人の説得にまけ、「自らをユダヤ教の習俗に従うに至つた多数の者の一人 (unus multorum) とする」^④者さえ見られたことを伝える。ユダヤ人の宣教者には旅廻りの巡回宣教者があり、彼等はイエルサレム神殿の存在した間は、これから派遣されて到る処のディアスポラのユダヤ人の会堂をめぐり、彼等の信仰をかたくし、神殿とのつながりは彼等によって保たれた。この巡回宣教者は本来のユダヤ人の信仰のかためを任としたのであり、異邦人への働きかけは専ら一般ユダヤ人が行つたのでなからうか。これら巡回の宣教者の中には呪術を弄する如きいかさま師もまじっていることもあり得た。ローマ文人はユダヤの乞食女までも宣教している姿を伝える。「持ち物としては手籠一つと一束の枯草 (寝床用—筆者註)、その乞食女がイエルサレムの律法のときあかしをする。」^⑤

ユダヤ人の説得にまけてユダヤ教への改宗を行つた異邦人は単にローマ市においてのみ見られたわけではなく、それは多かれ、少かれ、ユダヤ人の居住した都市到る処に見られたことであらう。既に東方各地のギリシヤ人勢力の優勢な地方においてすら改宗者を獲得していた。ヨセフォスはシリアにおけるギリシヤ的都市アンティオキアにおける多数のギリシヤ人の改宗者の存在を伝え、又到る処で多数のギリシヤ人が「我等の律法」を信奉するに至つたとする。^⑥

ギリシヤ人の反ユダヤ感情は両者の間の抜き難い神観や世界観の相違のほかに、この様な現実上のユダヤ人の働きかけに起因するところが多かつたとしなければならぬ。

ギリシヤ人やローマ人の如き異邦人が悔い改めを行い、ユダヤ教に入門するのは、それが新たに生れた新生児としてイスラエルの民の中に入りけいられることを意味し、かくて始めて生れながらのイスラエル人と等しい特権にあずか

ることが出来た。フィロンによれば、イスラエル人はシナイ山における奇蹟を通して律法を与えられたに對し、改宗者は直接に自らにそれを受けた者なる故、神に特愛される者であつた。^⑩改宗のための手續きとしては第一に割礼、次いで潔めの洗礼と神への供犠があつた。改宗者は新生児なるが故に旧名を捨て、新たに命名され、又改宗によつて身分的にも変更が生じたものとされた。例えば、改宗後にもうけた子は改宗前に生れていた子に優先して相続權を認められる如きである。^⑪

しかし、この様な改宗手續きとして必要とされた条件はどの程度嚴格に要求されたかについては疑問があり、正統なるユダヤ人で逆にギリシャ風の名前までもつていた例は普通に見られた事等から見て、實際上は個々の場合、種々便宜的な適用がなされ、全体としては極めてゆるい規定にとどまつたものと見られる。例えば、割礼の儀は男子のみに要求されたところで、女子は潔めの洗礼のみで條件をみたし得た。供犠もA.D. 70年のイエルサレム神殿の壊滅後は意義を失ひ、その觀念も大きく變ることになった。従つて完全なる條件をみたし得なかつた異邦人の改宗者も多数見られたのであり、改宗の度合いにも種々な段階があつたのも当然のことゝしなければならぬ。異邦人でユダヤ教に心ひかれ、これに改宗せんとした者達は「敬虔なる者又は神をおそるゝ者 (sebmemoi)」と呼ばれ、聖書の隨所に散見するが、この様な初心の入門者こそ改宗者の大多數を占めたものと考えられる。

異邦人の男子は市民的義務の一つとして土着の神々の祭儀に参加する等種々の公事に拘束されること多く、ユダヤ教の教義に関心を示しながらも、全面的な改宗にふみきるには種々の障害があつた。しかし、婦人の場合は、その社会的地位の低さからも公民的義務の拘束を受けること少く、又割礼という改宗の手續きを要しなかつた故に、男子に比してより單純に改宗し得たであらう。ヨセフォスはダマスクスのギリシャ市民達がその妻達のユダヤ教に心を奪われていることに不満を示した事を伝え、又ローマ宮廷關係の婦人の中にユダヤ教が進出した例などがあげられよう。異邦

人を安易に改宗者として受け入れる事に対する反対論は早くからユダヤ教内にも存在していた。やがてキリスト教という異端が彼等の間に現われ、彼等の間から「信仰うすい者」や異邦人のユダヤ教への改宗者達をとらえていった時にこの反対論は再確認されることになり、ユダヤ教は自らを守る防衛策をとらざるを得なかった。かくてユダヤ教の本来の性格である民族的要素は次第にたかまり、異邦人からの改宗者の存在はメシアの到来の時期をおくらせるものであり、それはイスラエルの民のレブラなりと極論する立場^⑮さえも見られることになってゆく。

しかし、ユダヤ教がこの様な姿勢にかたまる以前にあつてはディアスポラのユダヤ人は夫々の身分や地位に応じてそれなりに宣教活動を行った。又その様な普通の活動のほかに、諸種の社会関係をも宣教の手段とした。例えば、富裕なるユダヤ人で異邦人の奴隷を所有せんとする場合は、男奴隷には割礼、女奴隷には潔めの洗礼を強制して改宗を迫り、これをきかない場合はそれを他に転売しなければならなかった。^⑯後に、奴隷に対する割礼が禁令^⑰されていることは、ユダヤ人主人による奴隷に対するこの様な強制的改宗が一般化されていたことを証するものである。

ユダヤ教が異邦人のいかなる階層に浸透していったかについては種々の見方にわかれ、上層者を主にしたとするもの^⑱、逆に下層者に主として進出したとするものもある。^⑲個々の史料について見るといづれの場合も見られ、劃一的には考えられないものがある。こゝでは、「改宗者は異邦人の全社会のあらゆる階層に及んだ」とするムーアの最も穩健なる説^⑳に従うべきであらう。ともあれ、異邦人の改宗者は所在の会堂に出入りし、生得のユダヤ人と同様の宗教的特権にあずかり、外部からもユダヤ人と同じ扱いを受けていた。A.D. 初期におけるローマ在住のユダヤ人の数を数万とするが、これは非ユダヤ人でユダヤ教に改宗した者をも含んでいたものであり、ティベリウス帝の時、サルディニア島に送られた者や、後のクレストス事件にからんで追放された者の中にも当然含まれていたと見るべきであらう。更に東方各地におけるディアスポラのユダヤ人の数が過大に過ぎるのも、それは改宗した異邦人をも含んだ、広い意味で

のユダヤ教徒の教と解さるべきであろう。

クリスト教はユダヤ教の枠内に成立した新しい異端の教説として使徒達や初代教徒達によって広くディアスポラのユダヤ人の間に進出していった。彼等がその際獲得し得た信徒は勿論多数ではなかったにせよ、それは各会堂に入りしていた異邦人のユダヤ教への初歩的入門者、所謂「敬虔なる者、神をおそる者」と称せられた者達を主としたであろう。正統なるユダヤ人達はこの異端の教説を疫病の如く忌みきらい、それが伝わると到る処に大いなる動揺と騒ぎがおこった。正統ユダヤ人がこの新しい異端にとびこむためにはパウロ的に深刻な良心の転回を必要としたのであり、それは彼等にとっては至難なる事に属した。クリスト教は異邦人の未信者をそのまゝ直線的に信徒として獲得した場合よりも、一応ユダヤ教に入門し、多少ともユダヤ教的一神教にふれていて初心者達をとらえていった場合が多かったことは明かである。彼等はユダヤ教側からすれば、信仰うすき者達であつたにせよ、この様にディアスポラのユダヤ人によって広い耕地に種子は蒔かれていたのであり、それは別の新しい刈りいれ人の到来を待っていたのであつた。

ローマの市民意識に従えば、彼等の政治生活と宗教生活は切り離し得ない全体をなしていた。この様な意識は特に知識人や文化人の間に強かつたと思われる。カエサルの時以来、ユダヤ人はローマ権力者によって政治的立場から政策的に種々の特権を認められ、ローマの市民原理に服する義務を免除される一方、市民的特権には与り得るという特殊地位を承認されていた。しかし、これはローマ市民、特に知識人や文化人達のユダヤ人観を変えるものではなく、逆にその反感をかきたてるものであつた。

ローマ人は本来外来宗教に対しては寛容であり、ユダヤ人の宗教もその例外をなすものではなかつた。しかし、ユダヤ教は厳格な一神教であり、他の多くの東方的宗教と異つて密儀的要素をもたず、偶像的な御神体を祭つてその御利益に与る如きものではなかつた。この様なローマ人には理解し難い宗教を守り、特異な生活慣習を固守して異教的

慣習から自らを疎外するのみか、周囲のローマ市民にそれを宣教するが如き言動は感情的にも反撥せしめるものを充分にもつていた。

カエサルの反対勢力の中心をなしたキケロにはB.C.末期におけるローマの反セミティズムが集中的にあらわれている。彼はユダヤ人の宗教を軽蔑し、その神の無力さを歴史的に証明せんとさえ試みた。「ユダヤ人はポムペイウスがイエルサレム神殿をおかしたことに深い怨を懷くが、彼等の神が真に力ある神であれば、その神威によつて彼の冒瀆行為を未然におさえ得た筈である。これをなし得なかった彼等の神は無力にして崇敬するに足らぬ。」^②彼はユダヤ人をローマの敵として憎惡するが、それは彼が活躍したB.C.50年代におけるローマ在住のユダヤ人の動きに対する警戒意識を反映して居り、これらの反ユダヤ感情は彼の「フラックス井護論」に集中的に盛られている。この弁論は、小亜の地方官の任にあつたフラックスが小亜各地のユダヤ人が毎年イエルサレム神殿へ納める奉獻金(Aurum Judeorum)を途中でおさえ、これを着服したことで告発された時、彼がユダヤ人に対する憎しみをこめて行つた弁護演説である。この時、法廷にはローマ在住のユダヤ人達が多大の関心をよせて傍聴した。彼はこのユダヤ人達の氣勢におされ、彼等に聞きとられると騒ぎになるのを恐れ、法官のみにとどく位の低声で発言したという。

ローマ共和政の伝統の護持を主張してやまなかつたキケロに対し、それを無視せんとしたカエサルとの間にはユダヤ人に対する觀念とそれに基いた政策にも当然異なるものがあつたが、キケロの後にも、A.D.1世紀にかけて、時のローマの知識人や文化人にあつてはユダヤ人に対する同感や同情を表明したものは一つも見当らない。このなかにたゞ、ユダヤ人学者フィロンとやおくれてヨセフオスがユダヤ人側を代表してヘレニズム世界を風靡している反セミティズムにたちむかつたのであつた。

同時代のローマ文化人達はユダヤ人の宗教と生活慣習をどの様に見たか。ユダヤ人はすべて偶像的なものをきびし

く禁忌し、見えざる實在であるヤハヴェの神のみを拝んだ。見えざる神を拝むのを宗教と見るのは彼等にとっては困難であつた。「彼等は雲や天体を神として拝む」²³とされ、「彼等は神の霊のみを信ずる」²⁴ものと見られた。ローマの宗教と本質的に異なる点については、「我等が汚れたとするものを聖とし、我等の禁忌するものを有難がる。」²⁵従つて彼等は、ローマの神々に対して、「神々の威光をなみすること甚だしき種族」²⁶であり、又「迷信にかぶれ、（ローマの）宗教に反する種族」²⁷でもあつた。

この様なユダヤ人がローマ権力者にとりいり、市内に横行するのは、「彼等は常にローマの法を無視し、ユダヤの法を学んで、これをおそれつゝしむ」²⁸ものとして反感をそゝられた。彼等の宣教の熱心に負けてユダヤ教に改宗した者達は、「（我等の）神々をなみし、祖国を否定し、親子兄弟を無視するもの」²⁹であり、又「その子供に対して悪い手本を示す」³⁰ものとされた。そしてこの様な働きかけをするユダヤ人は「彼等は征服されながら、征服者におきてを課する」³¹ものときめつけられた。要するにローマ人には不可解な宗教に固執するユダヤ人と、その説得にまけて改宗したローマ市民はローマの公序良俗に反する許し難き者達であつた。

ユダヤ人がその特異な宗教的慣習を忠実に日常生活のうちに生かした時、ローマ人に何よりも奇妙なものは、彼等が七日目毎に安息日を守るという慣習であつた。この日には彼等はあらゆる勤労をやめ、異装をつけ、断食を守り、会堂における宗教行事に従い、安息日の行程を守つて遠出することもなかった。異邦人の改宗者をもまじえたユダヤ人会堂における集会はローマの若者達の好奇心を刺戟し、これをひやかし半分にのぞく者があり、又色事を求めて会堂のあたりを徘徊する者もあつた。³²ローマ人は彼等の安息日の厳守を勤労をいとう生来の怠惰から発しているものとし、「怠惰に身をまかせて暮しむきを考えず」³³、「無為懶惰の魅力のとりことなつたもの」³⁴ときめつける。又ローマ市における「くさいものづくし」の中に、「腐つた魚のにおい、さかりのついた牡羊の尿のにおい」等にあわせて、「安息

日の断食（しているユダヤ人の息づかい）の悪臭⁽²⁷⁾があげられている。ユダヤ人をたねにした地口やしゃれの類もかなり伝えられて居り、役者や道化師がユダヤ人の習俗を種に観衆の爆笑をまきおこすためには、ごく僅かの機智を働かすだけで足りた。⁽²⁸⁾

ローマの知識人や文人がユダヤ教徒に投げかけた批判や悪罵には深刻なものがあり、以上に掲げたものは採録し得たものの一部に過ぎない。これらユダヤ教徒に対して加えられている反セミティズムのたかまりは、それらはすべて彼等のローマ市における見聞に発しているとは限らないことを思わせる。それは彼等がローマ市において実際に経験したところによった以上に、広く地中海世界各地から伝えられた反ユダヤ観の集積にはかならなかったのではない。ディ阿斯ボラのユダヤ人がギリシヤ系市民と到る処の都市において対立し、それを反映してギリシヤ系文人達により数多くの反ユダヤ的著書が流布を見ていたのであり、それがローマ文人達に与えた影響も大きかったとしなければならぬ。特にアレクサンドリアよりの影響が考えられなければならぬ。すべての道はローマに通じた如く、地中海世界各地にわきあがっていたユダヤ教徒に対する反感や嫌悪がローマに集中的に反映されていたのであり、従ってそれはローマ文人達においては実状以上の深刻さを以て表現されたものと考えてよいであろう。

註

①アレクサンドリア出身のユダヤ人ティベリウス、アレクサンドロスはクラウディウス帝に重用されユダヤ属州の総督に任

ぜられた。Ant. XX100

②Acts 16. 母はユダヤ人、父はギリシヤ人

③Horatius, Sat. 1: 4: 143

④idem 1: 9 60

⑤Acts. 13a

⑥Juvenal, Sat. 6: 542ff.

⑦Bell. IV 45

⑧Apion. II 123

⑨Strack u. Billerbeck, Kommentar II S. 423

⑩idem I S. 928

⑪idem I S. 107

- ② Moore, Judaism I P.335
- ② Acts 13₁₄, 17₁₇ 18₇
- ② Bell, II 56
- ② Strack u. Billerbeck I 930
- ② Moore, op. cit. II P.136
- ② Juster, op. cit. II 72f,
- ② Graetz, Volkstümliche Geseh. des Juden 1923 I 601f.
- ② Montefiore, Synoptic Gospels 1927 Int. P.civ
- ② Moore, op. cit. vol I P.349
- ② Schürer, op. cit. III S.62
- ② Pro Flacco 28 Graetz, op. cit. I 458f
- ② Juvenalis, Sat. XIV
- ② Tacitus, Hist. V5
- ② idem V4
- ② Plinius, Hist. Nat. XIII

- ② Tacitus, op. cit. VI3
- ② Juvenal, op. cit. XIV101f
- ② Tacitus, op. cit. V5
- ② Juvenal, op. cit XIV96f
- ② Augustinus, De Civitate Dei 6:1
- ヤキヤの言ハント云エテ
- ② Persius, Sat. V ロロープのユダヤ人は安息日を Herodis deis
クロデのロニスニタ
- ② Horatius, Sat. 1:9
- ② Ovidius, Ars Amat, 1:75
- ② Juvenal, Sat. XIV
- ② Tacitus, op. cit. V4
- ② Martial, Epigramma IV IV
- ② Hausrath, Neut. Zeitgesch³. III S.76

(昭三七年一月)